

ルーダンの悪魔憑きの後日譚：
ドービニャックの「報告」

菊地英里香

はじめに

ルーダンの悪魔憑き事件は、17世紀フランスの修道院を舞台に繰り広げられた三大悪魔憑き事件(エクス、ルーダン、ルーヴィエ)のうちの2番目に起きた事件である。ミシュレは『魔女』(1862)の中で次のように言う。「この三つの事件はじつはひとつのものであり、同一のものである。いつでもきまって放縦な司祭があり、いつでもきまって嫉妬深い修道僧があり、猛り狂った尼僧があつて、この尼僧の口を通じて悪魔に語らせ、そして司祭がさいごに焼かれることになるのである¹。」

「悪魔憑きたちの劇場」という章がセルトーの名著『ルーダンの悪魔憑き』²にあるが、悪魔祓いが行われる各々の教会はまさに劇場であり、悪魔憑きの女たちは女優さながらであった。その多くが良い家柄の出である修道女たちは、平常時は穏やかであり、キリスト教の信仰に忠実な行いをし、勤めに励んでいた。しかし、悪魔祓いを待つ群衆のために教会に入り、台に寝かされ拘束され、その後悪魔が現れると、彼女たちは豹変した。痙攣し、叫び声をあげ、狂乱に捕らわれた彼女たちは、冒涇の言葉を口にする。悪魔祓いの舞台は、悪魔憑きたちにとって、抑圧している感情や欲求を爆発させる場ともなっていた。悪魔祓いの際に、彼女たちは日頃は自分たちの上に君臨している司祭たちを侮辱し、嘲笑し、殴打することもあった。このようなアドリブが許されていたものの、悪魔祓いという劇には当然、筋書きがあり、女優達にはその中で役を演じ切ることが要求されていた。悪魔憑きの肉体的症状や言動は、見ている者たちの期待通りでなければならなかったのである。とはいえ、彼女たちが単に人々をだましていたというわけでもない。悪魔憑きが苦しむ様子を目撃した者たちが本物だと信じ、悪魔憑き本人も実際に身体の不調に耐えている場合の方が多いという³。(想像妊娠やプラセボ効果と同じような現象とでも考えたらよいであろうか。)人々を納得させる、迫真に迫った悪魔劇においては、女優たちはその役になりきっていた、あるいは役に乗り移られていたとさえ言えよう⁴。

ルーダンの事件では、修道女たちに悪霊を送り込んだ魔術師とされた司祭の死

によって事態は終焉を迎えたわけではなかった。彼の処刑後、この事件に関する出版物の氾濫が起こる。裁判に関する賛否両論はもとより、悪魔祓いの見聞録を大衆向けに記したものなども多く出回った⁵。魔術師の死後すぐに悪魔憑きの女たちが悪霊から解放されることはなく、ルーダンでは彼女たちに対する悪魔祓いが引き続き行われ、多くの見物人たちを集めていたのである。今回取り上げるドービニャック（本名フランソワ・エドゥラン、1604–1676）がルーダンの地に足を踏み入れたのも、グランディエが処刑された数年後のことである。博識な神学者であり、劇作家、演劇の理論家でもあったドービニャックは、悪魔憑きの女たちおよび悪魔祓い師たちの言動をどうとらえたのだろうか。彼の観察からはどのようなことを学ぶことができるであろうか。刊行されることのなかった彼の報告を丁寧に読み解いていくこととする。

1. 背景

1.1 ドービニャックについて

後のドービニャックことフランソワ・エドゥランは、1604年8月4日にパリに生まれた。彼の母カトリーヌ・パレは、高名な外科医アンブロワーズ・パレ（1510/1517–1590）の娘である。父のクロード・エドゥランは貴族の出でショフルの領主だった人物だが、高等法院で弁護士、財務院で評定官を務めた。彼はそのかたわら、オウィディウスの『名婦の書簡』の仏訳にたずさわった。フランソワは11歳の頃にはラテン語を少し理解するようになっており、家庭教師から離れ、ギリシア語、イタリア語、修辞学、詩学、天地学、地理学、歴史学、法学、神学、などの諸学を独学で学んだという。しかし、実際のところは膨大な書物を所蔵する博学な父親が彼に学問の手ほどきをしたと推測される⁶。1610年にはヌムール（パリの南東方、フォンテーヌブローの南にある町）に移り住み、やがて教会法の博士号を取得した後、弁護士となった。

フランソワ・エドゥランは、23歳の時に『獣、怪物、悪霊のサテュロスたちについて』（1627）という、悪魔学の書物を出版する。この本により、彼は注目されることとなった。修道会に入会してから4年後、リシュリューにより、その甥のフロンサック公の家庭教師を任された。そしてブルジュ教区のノートルダム・ドービニャック修道院の修道院長の地位も賜った（彼の通称 l'abbé d'Aubignac の由来）。こうしてリシュリューの取り巻きの仲間入りをしたドービニャックは、学

芸に関心の高かったこの枢機卿のために、演劇の研究に精を出すこととなった。

ドービニャックは、1642年に『オルレアンの処女』、『シマンデ』、1647年には『ゼノビア』という3つの悲劇を散文で発表した。

彼の主著とされる『演劇作法』(1657)は、リシュリユーの要望に応じて書かれたものである。そこでは、悲劇が扱う一日の長さの規定や筋の一致、事件の仕組み方や結末の迎え方などが詳しく論じられている。本書の中で目を引くのは、「真実らしさ」⁷という概念である。『演劇作法』の第2部で「演劇に関するすべての基礎は真実らしさである」⁸とドービニャックは宣言しているが、すべての細やかな技術や作法は究極的にはこの「真実らしさ」の実現のためにあり、劇詩を合理的に根拠づけ、支え、区切りをつけることができるのはこの真実らしさしかないとする。『演劇作法』は1642年には完成していたが、リシュリユーの死によって出版が遅れた。

ドービニャックは、「ホメロス問題」にヴォルフ以前に見解を著した人物でもあった⁹。彼は『イリアスについての学究的な推定、あるいは論説』において、ホメロスという人物は決して存在せず、その名に帰されている詩の数々はいくつもの作品の寄せ集めに過ぎないと主張した。ドービニャックの考えの根拠は、ホメロスという人物の生涯がまったく不明であるという事実にあった。この原稿の検閲を任されたアカデミー・フランセーズの会員だったフランソワ・シャルパンティエは、「学識に満ちているものの、この作品は彼の名誉とはなるまい」と評した。ドービニャックの抵抗にもかかわらず、シャルパンティエも譲らなかったため、本書がドービニャックの生前に出版されることはなかった。晴れて出版されたのは1715年のことである。なお、本書は1666年から1670年のあいだに構想されていたようである。ドービニャックは1676年7月25日にヌムールで死去した。

1.2 ルーダンの悪魔憑き事件およびジャンヌ・デザンジュ院長について

サン＝ピエール＝デュ＝マルシェ教会の主任司祭のユルバン・グランディエは、博学で優れた説教師であり、ルーダンの町のバイイや司法官たちと懇意にしていた。その一方で、敵も多い人物であった。その理由は、敵対者たちに対するグランディエの傲慢な態度に加えて、何人もの女性たちと彼が極めて不適切な関係をもっていたことにあった。グランディエの語り口は人々を魅了し、教区の多くの女性たちは彼の虜になっていた。尊大で傲慢で好色なこの若き司祭は、上席権や行列の順番をめぐる問題や痴情のもつれのために、数々の訴訟を起こされてもいた。グランディエがウルスラ会の修道女たちにも手を出していたかは不明だが(可

能性は低いだろう)、彼女たちは彼の噂を興味深く耳にしていたはずである。修道女たちが一致して認めていたことは、夜寝室にグランディエと似た容貌の男の霊のようなものが現れ、彼女たちに淫らなことをささやき、不敬なことを持ち出して同意をとりつけようとしたということである。この霊の出現ののち、修道女たちに憑依現象が現れた。ジャンヌ・デザンジュに取り憑いた悪霊は、悪魔祓いの際にグランディエを魔術師であると繰り返し告発した。グランディエを擁護する者たちがいなかったわけではなく、悪魔憑き女たちを観察した医者たちの中にも懐疑的な見解を示した者があったが、ローバルドモン男爵の介入によりすべての道筋は決定された。この事件の裁判に対して国家から全権を委任された彼により、グランディエは裁判にかけられ、死刑判決を受ける。このような判決の下された背景には、グランディエに対する怨恨や嫉妬、当地での権力者間の対立のみならず、ルーダンでのペストの流行、さらには国家による宗教的および政治的な中央集権化という大きな流れがあったことも見逃せない。グランディエが罪状を否認したまま焼かれたのは、1634年8月のことである。

次に、ドービニャックがルーダンで出会うこととなるジャンヌ・デザンジュ院長について触れておく。1605年、ジャンヌ・デザンジュはガスコーニュ地方の貴族であったルイ・ド・ベルシエの娘として生まれた。16歳の時ポワティエのウルスラ会修道院に入った。1627年にそこを出ると、新たに創設されたルーダンのウルスラ会修道院に移り、弱冠22歳で院長の座に就いた。当地で主任司祭をしていたグランディエとジャンヌは面識がなかったものの、この色男の噂を耳にした彼女は彼に対して勝手な思いを募らせていたようである。『自叙伝』において、その心情を彼女は述懐している。「彼を見ていないときには、私は彼への愛で身を焦がしました……彼が私の目の前にいるときには不浄な考えと沸き上がる動揺に打ち勝つだけの信仰が私には欠けていました。悪魔たちは決してこのような無秩序を私の内部に作り出すことはなかったのです¹⁰。」かなわぬ恋心に苦しむジャンヌがグランディエのスキャンダルを耳にして愛憎相半ばの感情に捕らわれたとしても不思議はない。彼女のみならず、他の修道女たちにも似たような感情の動きやその伝染が見られたのであろう。

グランディエの処刑後、ジャンヌや他の修道女たちが悪霊たちから即解放されたわけではなかった。彼女たちに対する悪魔祓いはその後も続いた。1634年からはシュラン神父もこれに加わり、霊的指導者となった彼とジャンヌは長期にわたる交流をもつことになる。ジャンヌには7匹の悪霊が取り憑いていたが、それらは1634年から1637年のあいだに追い払われていった。悪霊たちは退場の際に、

ジャンヌの左手に「マリア」、「ヨセフ」、「イエス」、「フランソワ・ド・サル」の名を赤い文字で刻み込んでいった。さらに別の驚くべき出来事も起こっていた。過酷な悪魔祓いによって病に苦しみ危篤状態に陥っていたジャンヌは、病の床で美しい若者の姿をした守護天使の姿を見た。痛みがあった体の右側に彼が手を当て塗油するとその痛みは消え、後日彼女の下着のその部分には天の香油の5つのしみと芳香が残っていたという。文字の刻まれた手とこの下着はすぐさま崇拜の対象となり、多くの人々がルーダンに押し寄せ、ジャンヌの手の文字に触り、接吻し、その手に布や紙で触れていったという。こうして悪魔憑き女から聖女同然へと変貌を遂げたジャンヌは、1638年からフランス各地を巡り歩き、各地で歓迎を受けることとなった。パリでは貴族や司教、リシュリュー、国王ルイ13世夫妻も彼女のもとを訪れた。その後、彼女は1665年に亡くなるまでルーダンで修道院長として過ごした。

2. ドービニャックの見た悪魔憑き

2.1 視察旅行に至った経緯、ルーダンでの初日のできごと

グランディエの死後もルーダンでは悪魔祓いが続いており、様々な社会階層に属する多くの人々が見物にやってくる。パリの上流社会の人々も例外ではなく、リシュリューに派遣されてやって来た王弟ガストン・ドルレアンは、これが真正であると確信して帰っていった。ドービニャックも悪魔憑き現象にかねてより興味をもっていた。「報告」の冒頭で、彼は次のように述べている。

ルーダンの悪魔憑き女たちがフランス中に引き起こした大騒ぎと、この神秘への信仰に関して世論を分けてきた様々な意見が、かねてより私にこれらを細部にわたって検討するために間近で見たいというこの上ない欲求を与えていた。エギヨン公爵夫人のリシュリュー〔都市名〕への旅行は、私にとって大変好都合をもたらした。すべてに対し謙虚な敬意と寛大さをもって自らを従わせる彼女の敬神は、おそらく教会にとって役立ち名誉となるもので、決してこの悪魔憑きが真正のものだということに異論を唱えたことはなかった。だが信仰箇条の1つではないため、ただ単に報告を得るのではなく、その証拠を知りたいという好奇心はいかなる合理的な精神によっても非難されないだろう。よって、彼女はルーダンに赴くことを決意した。だがその前に、起こっていたことすべてに通じていた

いと望んだ。そして私がすべての秘密を明かすのに十分にたけているのではないか、少なくとも私が彼女に見たことすべてをありのままに報告するために十分正直な人間であると考えた。彼女はそこを訪れ、できるだけ最大限の注意を払ってすべてを考察してくるよう私に命じた。私は喜んで従い、帰ると彼女に報告を行った。その後で、彼女はそこに行くことを望んだ。私は謹んで彼女に同行し、あなたに書くものはこれらの旅行の双方で見たものである。あなたは自分の不都合のために真実を偽ることのない私の率直な気質をご存じであり、この論述が誠実なものだと信じるだろう。しかし、確信するために私が奇妙なできごとを十分に観察したかを判断していただきたい。というのも、これから順を追って詳述するいかなる事態についても、私はまったく決定するつもりはない。多くの人々が悪魔憑きの非常に決定的な証拠の数々があると言っており、それらを否定するのは無謀な行動である。たった一言から無数の争いが起こるのはこのやり方によってであろう¹¹。

かくして、ドービニャックは 1637 年 9 月 14 日の 11 時にルーダンに到着した。ブレイエの司祭とシャンピニの司教座聖堂参事会員のモントゥも同行した。この 2 人は悪魔憑きが本物であると確信しており、ドービニャックにそれを立証できると考えていた。彼らは到着するとすぐにサント＝クロワ教会に行き、バンジャミーヌという悪魔憑きの世俗の娘が 1 人の悪魔祓い師の足元に臥せているのを見た。悪魔祓い師が「悪霊は出てきたがらない」と言ったので、彼らは別の悪魔憑きを見に行った。その女はマリー・ボーリュという未亡人で、複数の悪霊に取り憑かれているという。その中に、レヴィアタンとロルという名前の 2 匹の悪霊もいた。ドービニャックたちが、彼女にいくつかの質問をラテン語ですると、彼女はそれにときにフランス語で答え、質問に答えないことも多かった。聖遺物を押しつけられると、まどろむかのように寝台に身を傾け、「好奇心旺盛なようだが、期待するような満足は得られないだろう」とドービニャックに言った。この言葉はすべての悪魔憑きの女たちが初めて見物に来た者たちに言う言葉だった。知りえないことについて悪魔が答えてくれたと多くの人々から聞いていたため、ドービニャックは悪魔に、「地獄にはペラギウス派とドナートゥス派のどちらが多いか」と尋ねた。質問に答えず彼女が抵抗したため、悪魔祓い師に「urge、urge(押さえろ、押さえろと)」と言うと、女は「ひどい、ひどい」と繰り返した。彼女は「urge を ure (燃やせ)」と取り違えたのだと彼は思った¹²。彼には彼女がそれほど変わったようには見えなかったが、人々は彼女の目の中にレヴィアタンが住ん

でおり、そのため混乱しているのだと言った。彼女は心身とも取り乱すことなく戸口まで彼らを送った。

ドービニャックは、同じ日の夜にもこの未亡人に対するイエズス会士のもとの悪魔祓いを見に出かけた。彼女は教会にやってきて恭しく入ると、抵抗なくストラ（帯）を受け取り、悪魔祓い師の発する定式書にある言葉を辛抱強く聞いた。悪魔祓い師が「現れよ」と目に見える合図で命令すると、女は叫び声をあげ身をよじらせ、悪霊に苦しめられているかのような状態になった。教会の命令や聖なる物の提示により怒りの中で悪霊たちが苦しみ、奇妙な動きをして自分が誰であるかを明かせば、見物人たちは満足して受け入れるのだろうとドービニャックは考えた。その後、悪霊はキリスト教の教義についてのありきたりな説教をした。聖書や教父たちの教えの中に、悪魔が我々の教化のために尽力するという例を見たことがないため、おかしなことのようにドービニャックは感じた。次いで、ウルストラ会修道院でのモランによる悪魔祓いにも立ち会った。彼は修道女たちの聴罪司祭でもあった。モランは、悪魔憑きが真正だということをさまざまな驚嘆すべき出来事の話によって、ドービニャックに信じさせようとした。しかし、彼はモランに、「私は聞くためにではなく見るために来たのだ」ときっぱりと答えた。

このように、ドービニャックは早くも初日から精力的に活動を開始した。行間からは悪魔憑きの真正に対する懐疑的な気配も感じられるが、自分の目で見て判断したいという強い意志と冷静な観察力をうかがうことができる。

2.2 悪魔憑きの真正を疑わせるいくつかの点について

(A) 言語の問題

多くの言語を理解し話すことが可能となるということは、悪魔憑きの特徴のひとつである。この点に関しては、先ほどのラテン語の間違い以外にもドービニャックはいくつもの疑惑を抱かずにはいられないやりとりを目にしている。例えば、マルトという修道女の悪魔祓いの際にそれは見られた。

悪魔祓い師が彼女に対して、「おまえは神のものなのだから(tu Dei es)神に従わなければならない」と言ったとき、彼女は「ああそうだ、私は神だ」と答えた。これは我々を驚かせ、悪魔祓い師は彼女がラテン語をこれほどわかっていないことをいまいましく思った。だが、すぐに彼女は言いなおした。「おまえは私がおまえの言ったことを理解しなかったと思っているだろうが、それは間違いだ。というのも、おまえは私が神のものだと主張するが、私は私が神だと言いたいのだ¹³。」

悪魔憑きのこの発言は幾通りかに解釈が可能だとドービニャックは言う。

というのも、これらは意にかなったときに都合よく答える悪魔の巧妙さであり、悪魔は間違いを皮肉でもって居合わせた者たちの精神に不安を残すために言い直したと言われよう。また他方では、これらの娘たちの、*Dei* と *Deus* のようなほんのわずかな単語の変化が意味に大きな変化をもたらすこの言語についての知識がしっかりしたものではないため、無知によってこれらの間違いを犯し、間違っただけを居合わせた人々の驚きあるいは悪魔祓い師の表情から悟って、如才なさによって示されたことだとも言う。だが後者のように考えると、不敬神で忌まわし行いをまじめな人々のせいになさなければならず、これはキリスト教徒が完全で揺るがぬ証拠がないなら決して信じないであろうことだ。そして、疑いなく前者を信じるなら、幾分の嫌悪感なしにそうはできないのだが、これらの悪魔憑きたちに何の異常も見出さないということになる¹⁴。

また、悪魔祓い師のうちの1人であったモランが悪魔憑きたちがいくつもの言語、さらにはギリシア語も理解できると言った際に、ブレゼ（ドービニャック一行のうちの1人）は彼女らに英語で話しかけてみるよう助言した。モランはこれに激怒し、ポワティエの司教によって憑依が真実だと認定されたのだから、もはやこれ以上悪魔憑きの証拠を探す必要はないのだと言い放っている。モランはローバルドモン男爵とエギヨン公爵夫人の前でも、悪魔憑きたちがギリシア語を非常によく理解しており、ニームの司祭がギリシア語で悪魔祓いした時に的確に答えたと主張した。ドービニャックはこれを非常に疑わしことだと考えた。なぜなら、彼はニームの司教とは知り合いであり、司教が容易にあやつれるほどこの言語に通じていないことをよく知っていたからである¹⁵。モランがニームの司教が証明したと言ったため、証明書を見せるようドービニャックは要求した。モランは見せると約束したが、結局それは果たされなかった。

このように、悪魔憑きたちの言語能力はかなり怪しいものだったと言わざるを得ない。ドービニャック自身も彼女たちにしばしばラテン語で話しかけた。彼が悪魔祓いや聖務日課書にでてくる言葉や表現で話しかけると彼女たちは答えることができたが、フランス語から類推不可能な一般的ではない言い回しや格言に対しては、答えず頭を揺らすだけだった。とはいえ、これが悪魔憑きの真正を否定する決定的な証拠になるとはドービニャックは考えていない。この言語に関する能

力は、『ローマ定式書』(1614) に記されている悪魔憑きを証明する他の証拠¹⁶がある場合は必要な証拠ではないからだと言¹⁷。

(B) 身体の異常な動きや状態 (痙攣、ねじれなど)

ドービニャックは、ルーダンに到着した日の夜に行われた世俗の未亡人マリー・ポーリュへの悪魔祓いの際に、早速これを目撃した。

未亡人はさまざまな叫び声をあげた後、体を後ろに反らせ、頭をのけ反らせ、顔は黒ずんでゆがみ、舌は分厚く黒ずみ、口から飛び出した。腕は伸ばされやや曲がり手は硬直した。悪魔祓い師が何と言おうと、それらを折り曲げさせるのはたやすいことだ。というのは、私自身が何度もその経験があるからだ。この身体におけるすべての動きに関して、私は可能なことと自然に容易であることしかそこには見なかった。長時間その体勢をとり続けるというなら話は別であったが。さらに私はしばしばこの女が何度か休憩してからこの興奮状態を繰り返すのに気が付いた。これはすべての他の悪魔憑きたちにおいても見られたことである¹⁸。

腕が不自然なように曲がったり、悪魔憑きの体を動かせなくなったりするような現象に関しても、人々が超常現象だと考えるようなものではないとドービニャックは見抜いた。例えば、クレールという修道女が悪魔祓いを受けた際に、ゆっくりと力のない動きで体をねじ曲げたあと、両方の太ももを地面につけたまま両足を一直線に広げた。これは確かに困難でつらいことではあるが、不可能なことではない。それに、慣れている者ならやすやすとできることである。イタリア人のコラスとかいう者がパリの劇場でさんざん行ったことであり、そこではそれをするのに慣らされた10歳から12歳くらいの彼の息子の器用さに人々は目を奪われた。クレール修道女のこの体の伸長に関して、悪魔祓い師たちは両足のあいだの距離が娘の身長よりもずっと開いていることに注目させ、容易にはできないこのことを体に取り憑いた悪魔による現象に帰したのだ¹⁹。

舌に張りついて落ちない聖体に関しても同様のことが指摘されている。これはたやすくできることだ、とドービニャックは言う。舌は乾いているか濡れているかであり、もし乾いているなら聖体は固定されず、もし湿っているなら聖体はすぐさま濡れてしまい消え去るというジレンマを持ち出し、悪魔祓い師たちは人々の心の中にこれが超自然的現象だと受け取らせていた。しかし、舌を聖体に接触させればそこにとどまり、この修道女がやったように舌を口の片側に曲げれば、

残りの口の部分は開いてたるむ。そのとき、息がかかってもこの聖体パンは落ちない。舌の厚みが邪魔して、息がねじったそちら側にはいかず、すべてが逆側から出るからだ。10人がこれをたやすくやってのけ、ドービニャック自身も確信を得るため何度もやったという²⁰。

(C) 千里眼、予知

修道女クレールの悪魔祓いに最初に立ち会った際、ブレの司祭がドービニャックに話しかけるときに3, 4回「アベ (abée (修道院長))」と呼んだ。もし悪魔憑きの女が自分にこの同じ身分を言うなら、司祭はこれを予知だと主張するだろうとドービニャックは想像したが、そのとおりになった。ドービニャックが何と言おうと、司祭はこれが悪魔憑きの疑いえない証拠の1つだと主張した。ドービニャックからすれば、すべての悪魔祓い師とジャンヌ院長が彼のことをすでに知っていた状況であり、3, 4回司祭が自分を呼ぶのを耳にしたので、悪魔憑きが同じように自分を呼んだのは特に驚嘆すべきことではなかった²¹。

ブランシャールという世俗の女の悪魔憑きが悪魔祓いされた際にも、ドービニャックについての言及があった。悪魔憑きは、「心の中に描いている考えに従うなら、決して司祭にはなれない。解決することのできないある人物の思い出を持っているあいだは」とドービニャックに告げた。彼はこれを相手の気質から判断し、人々の状況についてありふれたことを言うジブシーの占いのようだと思った。この悪魔憑きの女は、ドービニャックが聖職者ではあるがまだ司祭ではないと知っていた。(司祭ではない、とこの女に重々言ってあった。)

自分が若く見え、悪魔憑きのこの女の言動すべてを笑うような陽気な気質をしていることから、俗世を生きるすべての正直な男たちのように、至極ありふれた情愛をもっているだろうとこの女は考えたのだろうとドービニャックは推測し、以下のように述べる。

しかし、さらに私が奇妙だと思ったのは、一座の者たちがこの訳の分からない話を、これらの悪霊たちの隠された知識だと私に受け取らせようとしたことである。私には自分を聖職から遠ざけるようないかなる考えもなく、地上に生きているある女性に愛情も好意も記憶も、心の中にありはしないと誓った。彼らは作戦を変え、これは私を欺き私からこの悪魔憑きへの確信を取り除こうとする悪魔の如才なさであると言った。もし私にほんの少しの感情、あるいは浮いた恋の残滓が頭にあったなら、悪魔は私に驚嘆すべきことを言ったことになったであろう。

だが、私は完全に彼の言った愚かさから遠ざかっていたので、これは悪魔の悪巧みだとされた。娘たちが自分の言っていることを確信していないときには、悪霊たちがしゃべっていると我々に信じさせるのである²²。

このブランシャールという悪魔憑きは、別の日にも予言めいたことを2つ言った。まず1つめは、帰るときにドービニャックの馬の脚はないという発言である。彼は4輪馬車で来ており、トゥアールから迎えに来るランブイユ嬢を待っていた。したがって、まったく存在しない彼の馬の脚がなくなったところで何の害もないのだった。もし彼女が馬ではなく4輪馬車で帰ると言いたかったのだとしても、このように脚がないと言うのは下手な説明だ。もし帰り道で4輪馬車の馬の一頭がけがをするか足が不自由になるのであれば、これが奇跡で悪魔はうまく言ったものだということになるのだが、と彼は思った。2つめは、ドービニャックが激しい下痢を起こすだろう、という言葉だ。彼女はこのことを何人かの者たちに言ってもいた。若者たちは大食いすると推測し、彼らが下痢をкаろうじて免れていると考えてのことだろうとドービニャックは考えた。彼は翌日下痢になったが、これは1年前から毎月起きていることであり、いつもの治療法により2日で治った。もし偶然に彼女が下痢あるいは他の一般の病気で脅したのなら、体の悪い癖が知られており、次の不調を予知したと自分を納得させられたらとドービニャックは言う。多くの似たようなうまい言い方のどれもが確かな予知と思われていると彼は確信した²³。

3 深まる真正への疑惑

3.1 ジャンヌ院長の手に刻まれた印、悪霊の出現について

ジャンヌ・デザンジュ院長には、当時まだベヘモットという名の悪霊が取り憑いていた。彼女は悪魔祓いの儀式のあいだもじっとしており、数か月前から特に異常なことはしていないという話であった。ベヘモットは以前には超自然的な体のねじれを彼女に引き起こしたが、今ではめったに彼女を苦しませることがないとのことだった。ドービニャックは、彼女におかしなところを認めなかった。かつて取り憑いていた2匹の悪霊が出て行くしるしに手に刻んだという2つの印を見たいと彼が申し出ると、許可された。彼女の左手には美しく書かれた大文字で MARIA JOSEPH と書かれていた。文字は赤みを帯び、浅く刻まれて乾いたようで

あり、ほんの少し光っていた。22 か月ものあいだこれらの文字がこれほどよく読めるというのは、驚嘆すべきことのように思われようとドービニャックは言う。

しかし、マルタ島では男たちは慇懃さから恋人の名前を皮膚に刻み、それは決して消えることはない。さらに私はある利発なくつかの秘密に通じている令嬢を知っている。賢者の石に長いあいだ専心しており、自ら（なぜなら、どのようにそれを知ったか決して言おうとしなかったからだ）血を出させるために、しかし深すぎず血があふれ流れ出す手前くらいに、よくとがった鉄で、ある男の皮膚をぷつぷつと十分に深く刺した。それから、それぞれ隣りあった針の穴から出た血を乾かすと、皮膚にしみを付けながら望むように描いた印が残る。それらは 1 週間から 2 週間は残るだろう。彼女は腕に文字を記しており、それは枢機卿猊下とエギヨン夫人さらに信用できる何人かの人々に見せられた。私はそれを見て吟味した。それらはウルスラ会の修道院長の手にある文字と実に似たようなものであった。想像されうるようないかなる違いもなかった。6, 7 日後、それらは薄れ、少しずつ消えていった。私はこれを週末にこれらの文字について見とめた。そのとき、人々はこれらが近く再生すると言っていた。

したがって、この印を悪魔憑きの有力で確かな証拠としようとする者たちに理はない。なぜなら、これはありふれたことで人々のあいだで容易なことだからである。それゆえ、これらの文字がどのように作られたのかをありのままに知らなければならぬ。即座に出たのか、少しずつなのか、人が見ているところか、隠れてなのか。というのも、何人かの好奇心の強い自然学者はある種の強い液体で、時間が経過した後でなければ何もそこに現れることなく、人間の皮膚に望むよう書いたと私に言った。私はあなたに、つまりすべての我々の知識人にこの証拠を判断しこれらの秘密の真実を確かめる自由をゆだねる。人々は私にベヘモットが出て行く時にそこに残すに違いない JESUS に場所を作るため、書かれて以来これらの名前はかなり親指に近づいたと言った。はじめから見ていないので私にはわからないのだが。人々は、毎週土曜日に文字の色が再生するとも言ったが、そのときに私はこれを経験しておらず、次の土曜日にそれらを見たが、そこにいかなる違いも見出さなかった。まさにその月の 26 日の土曜日、公爵夫人がルーダンにいらした時、修道院長は、《朝の 5 時からしるしが再生した》と言って我々に手を見せた。それが前夜には消えていたということをローバルドモン氏が請け合った。これがそれらをよく検討する機会を与えた。私はそれらが以前より赤くなっており、へりが炎症していることに気づいた。これが古い文字の上を針で刺した

ように見える、この炎症が明らかな影響でありしるしだ、さらには、あることを超自然のわざだと全面的に見なすためには、この再生がまったく自然とは思われない手段でなされたのでなければならず、さもないと少し風変わりなすべてのことがらが悪魔憑きの証拠として通ってしまうなどとは誰も言わなかった²⁴。

悪魔祓い師のモランは、ジャンヌ・デザンジュ院長に取り憑いているベヘモットにより驚異を目にできるに違いないから、悪魔祓いを見せにランブイエ嬢を連れてくるように何度もドービニャックに頼んだ。この件について、ドービニャックは次のように記している。

この確信は私を驚かせた。数か月前からこの悪霊はめったに現れることがなかったからだ。だが、彼は悪魔祓い師たちが強制する限り必ずそれ〔ベヘモット〕が対話中に現れると言って、これを繰り返した。彼は次の言葉を私に言うのを忘れた。《王弟殿下がここにいらした時、驚異をご覧になった。もしこれをまったく知らないなら、驚くことでしょう。》正直なところ、このようなすべてのことがそろって私には腹立たしかった。というのも、少々の悪意をもって判断すると、修道院長の悪霊の出現は随意に行われていると言うことができ、オルレアン公殿下がルーダンに行く気になった時、彼らはまったく当惑しなかった。彼の前では彼が見ていない時よりも大いにそれをさせる力をもっていたから。しかしながら、私はこのような考えをもたずに、彼が私に誠意をもって言っていると信じようとした。この発言の後で私に疑わしく思われたことは、我々にランブイエ嬢は軽食をとり、その後すぐに出発すると告げられたことだ。その時からベヘモットは現れはじめ、修道院長は床に倒れて舌を出して叫んだ。だが、この合間に私はランブイエ嬢のお付きの者たち数名と外に出た。するとすぐさま興奮状態もなしにベヘモットは出現を終えた。まるで彼は現れるためにランブイエ嬢だけを待ち、休むために私たちが出て行くのを待っていたかのようなようだった。それゆえ、ランブイエ嬢はその後すぐに到着した時（私たちは間違った知らせを受けていた）、すべての悪霊は祓われ、娘たちが解放されているのを見た。これほど素早くなされるのはいつものことではなく、それほどこの悪霊たちはこれほど美しい令嬢が彼らを訪問するのをないがしろにしたことが悔しかったようだ。というのも、ここで言うておくべきなのだが、彼女を悪霊どもは敬っており、決して汚い言葉を吐くこともなければ、他の人々にしていたように唾を吐きかけることもなく、彼女のいるところではいかなる卑猥なことも言わなかった。さらに、「このような親切なお

方に逆らってはならない」とそれらのうちのひとつが大きな声でとがめるようなことを言いさえした。そしてほとんどまったく同じことが翌土曜日にエギヨン夫人にも起こった。これらの娘たちが敬意を払わねばならない方々に同じようにこれらの悪霊たちも敬意を払った。このように取り憑いている娘の義務に彼らの作用を合致させていたのだ²⁵。

ジャンヌ・デザンジュ院長の手に刻まれた文字の話も、このように彼女の都合次第で出現する悪霊も、ドービニャックの疑惑をさらに深めるものとなった。

3.2 悪魔祓い師たちのやり口

修道女のマルトに取り憑いた悪霊は、悪魔祓いの際にドービニャックの姿を見つづけるなり、「善きキリスト教徒たちのためには悪魔憑きが真正であることを証明するものを十分見せたが、無神論者にはいくらそうしても彼らが信じることはない」と語った。ドービニャックは、悪霊が無神論や不敬神を打ち砕くためにわざわざ労をとっていることに驚いた。ラテン語でドービニャックと悪魔祓い師が言葉を交わすと、悪魔憑きは理解できなかった様子だった。悪魔憑きはドービニャックに、「傲慢な奴め、私がおまえに乗り移れば、おまえは私が誰だか知ることになる」と言った。ドービニャックが、「神が力を与えなければ自分たちに危害を加えることができないのだから、悪霊の力など恐れていない」と言うと、悪魔憑きの女は言い返した。「教会は私の好きなようにさせている。あとで思い知るがいい、おまえは取り憑かれるだろう。ドービニャックが彼女に「教会はその子供たちに反して、決していかなる力も悪霊に与えることはない」と言うと、悪霊は悪魔祓い師に自分を解放しろと要求した。このようなやりとりに、人々はパニック的な恐怖に襲われ、ほとんど信じがたいような叫び声をあげ激しい恐怖にとらわれ教会の片隅に引っ込んだ。

その時、悪魔祓い師がドービニャックに「あなたは大きな危険の中に身を置いている。もし私が悪魔を解き放ったとしたら、何が起こるか分からない」と言った。ドービニャックは、これは非常によからぬ空言だとたしなめ、もし彼がそうしても、悪霊どもを追い払うために派遣されたのであり、それらを他の者たちに送り込むためにではないのだから、自分は恐れないうと語った。もしその力を乱用するならこれらの悪霊どもは、かつて我らの主の許しなしにはあえて豚の腹の中に入ろうとしなかったわけだが、我らの主がお許しにならなければ我々を害する力を持たない。我らの主がこのような悪しき意図を許すことがないよう願

っていると彼は言った。これらの言葉により、悪魔祓い師はドービニャックを恐れさせることはできないと悟った²⁶。

エギヨン公爵夫人が到着したとき、悪魔祓い師たちは彼女が一日で悪魔憑きすべてを見られるようにするよう要請された。ドービニャックは、これまでとは違う何か尋常ならざるものが見られるのではないかと期待した。しかし、その期待は裏切られることになる。エギヨン公爵夫人がやってくると、モランと他の悪魔祓い師たちは多くの奇跡を数え上げ、彼女に悪魔憑きが本物であることを納得させようとした。同席したローバルドモン男爵も悪魔祓い師たちの話を請け合った。これはドービニャックとランブイエ嬢に対しても同様に行われたことであり、このようなものはまったく理にかなっていないとドービニャックは思った。

なぜなら、たった一度のこの機会が人々の知性を妨害し、何も見ないうちに悪魔憑きへの確信を植えつけてしまうからだ。その結果、少しでもそれらしく見えるものを信じてしまい、悪魔憑きたちがするすべての愚かな行為を弁護するのだ。そして、彼らが重要だとすることに同意せず、彼らの出す証拠に毅然とし動じない者を見出した際には、「不信仰者」と叫ぶのだ。そして悪魔祓いの際に、すべての悪霊たちは決まってそう言うのである。というのも、彼らがこのように盲目的に悪魔憑きを信じさせる執拗さをもっており、モラン氏はそれを疑うことは、常識を欠いているということだと私に言った。私は彼に、超自然的なものを何も見ないまま信じることは愚かなことだ、ここまで悪霊たちは『定式書』が要求することを何一つしていないと言いつ返した²⁷。

モランはドービニャックに、この悪魔憑きはポワティエの司教が悪魔祓いを命じたのだから、常識がないと見なされる危険を冒してそれを疑う必要はないと言った。ドービニャックが彼の忠告に耳を貸さず、教会の決定と一司教個人の決定とのあいだには違いがあることを理解させようとする、彼は怒り大声で話し始め、人々は出て行った。そのときモランは、知識人ぶりたい者たちは好奇心が強すぎる、信仰心がなさすぎると言いながら去った。

誰かが公然と悪魔憑きに不利なことを言おうものなら、悪魔憑きの女たちはその者を不信心者か魔術師呼ばわりしていたが、これはドービニャックに対しても仕掛けられようとしていた。何人かの有徳な貴族たちがある悪魔祓いの際に目撃したことをエギヨン公爵夫人に伝え、ドービニャックは彼女からある手紙についての話を聞いた。この手紙は、ある悪霊が仲間である別の悪霊にあてて書いたも

のである。そこには3つの注目すべきことがあったとドービニャックは言う。1つめは、削除の線や修正が何か所か見られたことである。「まるで人間のように悪霊が自分の考えを書くのに苦労したのか、あるいは悪霊が悪魔憑きの女を自由にするためにその作用を少しのあいだ中断し、彼女が悪霊のものに自分の文体を混入させ間違いを犯したので、悪霊があとで訂正しなければならなかったのだろうか…あるいは、信じない者たちが言うように、たいして博学ではないこの偽の悪魔憑きの女が悪霊のふりをしようとして自分であるいは他人が訂正できるような間違いしか犯さなかったのかもしれない²⁸。」2つめは、悪霊たちが他の悪霊について語る時に名前に、**Monsieur** を付けて書いているところである。「ここから、人は彼らが守っている地獄における礼儀作法に感嘆しかねない。あるいはこのようにうやうやしく殿などを付けて呼んでいるこの手紙の偽造を馬鹿々々しいものだと見なしうる²⁹。」3つめは、この手紙にはエギヨン公爵夫人の近辺に魔術師がいると書いてあったことである。名指しこそされていないが、多くの特徴によってドービニャックを知っている者たち、あるいはルーダンで彼を見かけた者たちには容易にそれが彼のことを指しているとわかるように書いてあった。

これは声高にこのすべての陰謀をあざけり、悪霊たちは証明することができないことを書くとはそれほど愚かではない、もし常軌を逸した行いのすべてをまったく信じていなかった私にこれによって復讐したと思っているならこれらの偽の悪魔憑きの女たちは仲間たち共々実にばかげている、と言う口実を私に与えた。だが、エギヨン公爵夫人がそれについてはすべてのこの話の根底を暴くためには最も確実な方法であるから、何も言わずにこの中傷が取り消さすことができなくなるまで放っておくようにと助言した。これに私は心から同意した³⁰。

もはや、悪魔憑きが本物でないことは彼の目には明らかだった。最後にドービニャックは次のように述べている。「さて、私は自分のことをこれっぽっちも知らない者たちがこの偽の悪魔憑きに与えられえた信仰を壊さないために私を魔術師であると見なそうとしたのかわからないが、私が知り合う栄誉にあずかった方々は、これを疑う重要な理由をそこから導きだすだろうと確信している。私からすれば、もし私がこの手紙を見たとしたら、それは私が決心し、これに都合のいい他のすべての憶測を打ち砕くのに十分に正当な理由となるだろう。そして、すべての作用は欺瞞、見せかけ、憎悪、冒涇でしかないと確かに信じさせる十分に正当な理由となったことだろう³¹。」

おわりに

悪魔憑きが真正かどうか、ドービニャックは自分の目で見極めるために冷静沈着に観察し、時には悪魔祓い師や悪魔憑きの女に質問をすることもあった。言語の能力をはじめ、悪魔憑き女たちに悪霊が取り憑いている明白な証拠をドービニャックはつかむことはできなかった。おそらくは彼は悪魔憑きが真正であることに初期段階から懐疑的であっただろうが、常に断定を避けて何度も悪魔祓いの儀式に立ち会った。結局のところ、ドービニャックがルーダンで見た悪魔祓いの劇には、もはや「真実らしさ」が微塵もなかった。「ある一つの同じ悪魔祓いの方法、一式の同じ質問、同じ対話、同じ言葉、同じ動作、同じ突飛さである。もちろん彼女たちのあいだで興奮状態と悪魔祓いに違いがあるのは知っているが、とはいえ、それぞれに同じやり方があった。したがって、これは跳躍や動作をいくつか教え込まれ主人の命令に従って行い、その後でこれらを習得する動物を思い出させる」³²と彼は簡潔に述べている。ドービニャックにとって、悪魔憑きの女たちはもはや大根女優ですらなかった。

悪魔祓い師たちはドービニャックに悪魔憑きが真正であることを認めさせようと説得を試みたが、自分の見たことしか信じないという信念を持つドービニャックに対しては無駄なことであった。悪魔憑きの女と悪魔祓い師は、悪霊に取り憑かれるかもしれないと示唆して人々の恐怖をあおったが、これもドービニャックには通じなかった。もし恐怖が自分の精神を混乱させていたなら、悪魔憑きの女は人々の群れの中に私のことも逃げさせることができただろう、とドービニャックは記している。恐怖心から目に見えないものにおびえてパニックを起こし、災いを拡大してしまう現象は、現代においても見られることだ。恐怖心は理性を麻痺させ、判断力を狂わせる。体やパソコンに入り込むウイルスのことを考えてみるとわかりやすいだろう。正体が見えにくいものの脅威にいたずらにおびえず、冷静に観察し対処することで、被害は最小限に食い止められる。

どうしても悪魔憑きの真正を信じないドービニャックに対し、悪魔祓い師たちは彼を魔術師に仕立てるという最終手段にうったえようとしかけた。これに対しても、ドービニャックは冷静に対処した。真実を暴いてやりたいという気持ちがなかったわけではないだろうが、彼は挑発に乗ることなく無視したのである。もし彼が悪魔祓い師たちに戦いを挑んで敗れたとしたら、魔術師として処刑されていたかもしれない。このような茶番劇にこれ以上関わって面倒に巻き込まれるこ

とを彼はよしとしなかった。今回取り上げた「報告」は彼の密やかな復讐だったとも言えよう。

¹ ジュール・ミシュレ『魔女 下』篠田浩一郎訳、岩波文庫、1983年、pp. 122-123.

² Michel de Certeau, *Possession de Loudun*, 1990. (初版は1970年。邦訳も参考にした。ミシュエル・ド・セルトー『ルーダンの憑依』矢橋透訳、みすず書房、2008年.)

なお、ルーダンの悪魔憑き事件の経緯については以下の論文も参考になる。石井三記「ルーダンとその時代」『東海法学』第11号、1993年、pp. 171-216.

³ ダレン・オールドリッジ『幻想と理性の中世・ルネサンス』池上俊一監修、柏書房、2007年、p. 205. 悪魔祓い師の神父や悪魔憑きの診察を担当した外科医などの中にも、精神錯乱に見舞われた者や狂死した者がいた。後出のシュラン神父は自身が悪魔憑きになってしまった。もちろん、マルト・ブロシエ（1599年）のような偽の悪魔憑きと認定されたケースもあった。

⁴ ウダールは、悪魔憑きをパフォーマンスという概念の下で捉え直し、その劇は反省的に繰り返され、変化に対し開かれたものだとする。見ている者を騙す者でも悪魔でもなく、その間隙で社会の要求に応えながら能動的に動いて発言する女優としてとらえている。Sophie Houdard, «La possession de Loudun (1632-1637)», *Communications*, 92, 2013. Performance-Le corps exposé. Numéro dirigé par Christian Biet et Sylvie Roques, pp. 37-49.

⁵ Robert Mandrou, *Possession et Sorcellerie au XVII^e siècle*, 1997 (réimpression de 1979), p. 210.

⁶ Gilles Banderier, «Introduction», dans Hédelin d'Aubignac, *Des Satyres Brutes, Monstres et Démons*, Gilles Banderier (texte établi, présenté et annoté par), 2003, p. 9.

⁷ その内容については大いに議論されたが、「真実らしさ vraisemblance」の重要性は17世紀の演劇理論が一致して認めていた。この点については以下の論文がある。Patrick Garnier, «La notion de vraisemblance chez les théoriciens français du Classique», *Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest*, t. 8, n.1, 1976, pp. 45-70.

⁸ Abbé d'Aubignac, *La Pratique du Théâtre*, 1657, p. 92. 本書には邦訳がある。オービニャック師『演劇作法』戸張智雄訳、中央大学出版部、1997年。

⁹ この点に関しては、以下の論文を参照した。Dominique Casajus, «Quelques jours de la vie d'Homère», *L'homme* 195-196, 2010, pp. 333-358.

¹⁰ Sarah Ferber, *Demonic Possession and Exorcism*, 2004, p. 136.

¹¹ Abbé d'Aubignac, «Relation de M. Hédelin, Abbé d'Aubignac, touchant les possédés de Loudun au mois de septembre 1637», B.N., 12 801, f^{os} 1 à 10 ; Arsenal, 5554, f^{os} 108 à 146, dans Robert Mandrou, *op. cit.*, pp. 144-145. 引用文中の〔 〕は筆者による補い。

¹² *Ibid.*, p. 146.

¹³ *Ibid.*, p. 178.

¹⁴ *Ibid.*, pp. 178-179.

¹⁵ *Ibid.*, p. 171.

¹⁶ 『ローマ定式書』 (*Ritual Romanum*, XI-1)において、言語能力に加えて悪魔憑きの証として以下のものが挙げられている。隠されたあるいは遠くのことからを明らかにすること、超自然の身体的力、聖なるものへの拒絶反応。

¹⁷ Abbé d'Aubignac, «Relation...», dans Robert Mandrou, *op. cit.*, p. 172.

¹⁸ *Ibid.*, p. 148.

¹⁹ *Ibid.*, p. 163.

²⁰ *Ibid.*, p. 183.

²¹ *Ibid.*, p. 160.

²² *Ibid.*, p. 174.

²³ *Ibid.*, p. 180.

²⁴ *Ibid.*, pp. 153-155.

²⁵ *Ibid.*, p. 185-186.

²⁶ *Ibid.*, p. 169.

²⁷ *Ibid.*, p. 187.

²⁸ *Ibid.*, p. 192.

²⁹ *Ibid.*, p. 193.

³⁰ *Id.*

³¹ *Ibid.*, pp. 193-194.

³² *Ibid.*, p. 184.